
日本地球化学会ニュース

No .177

2004 .5 .15

主な記事

●学会記事

- 2004年度日本地球化学会年会のお知らせ(2)
- 会費滞納者の取り扱いの変更について
- 2004年度第2回鳥居基金助成の募集について
- Goldschmidt 2005シンポジウム募集
- 日本学術会議からのお知らせ
- 鳥居基金実施報告
- 研連，各種委員会議事録

●その他のシンポジウム，人事公募等の各種情報のお知らせ

- 第一回 SOLAS International Summer School 参加報告
- 書評

日本地球化学会のホームページが新しくなりました

URL アドレスは，<http://www.geochem.jp/>です。

より見やすく分かりやすくを目指しております。

研究助成，シンポジウム，人事公募等の各種情報は随時更新しておりますのでそちらもご覧ください。

会員の皆さまのご意見をお待ちしております。

2004年度日本地球化学会年会のお知らせ(2)

主催：日本地球化学会

共催：日本化学会

後援：静岡大学，静岡コンベンションビューロー，静岡市

会期：2004年9月20日(月)～9月22日(水)

会場：静岡大学静岡キャンパス共通教育A棟，大学会館（静岡市大谷836）

内容：課題講演，一般講演（ポスターセッションを含む），総会，学会賞等受賞講演

一般講演会発表分野：大気/降水，岩石/地殻，鉱床，有機物，生物，陸水，温泉/熱水，地球外物質，海洋，堆積物，環境，その他

日本地球化学会公開講演会：駿河湾から地球が見える

日時：9月19日(日) 13:00～15:00

場所：グランシップ6階交流ホール JR東静岡駅すぐ

課題講演 - 1 アラクルニウム地球化学

すべての元素・同位体に同等な証拠提出能力を認める地球化学

趣旨：1967年に始まったアラクルニウム計画から37年が経過した。我々はアラクルニウムを活用し，どれだけ宇宙と地球の真理に迫っただろうか。現時点での回答と未来への展望についての講演を募集する。

コンピナー：塚本尚義，平田岳史（東京工業大学）

課題講演 - 2 大気エアロゾルと前駆体の地球化学

趣旨：大気エアロゾルの化学組成とその前駆体の研究は，エアロゾルの放射への直接的・間接的効果に直結しており，気候変動研究における最重要課題の一つである（IPCC 2001）。本課題講演では，海洋・森林・都市エアロゾルやダスト，更には，揮発性硫黄・窒素化合物・有機化合物などエアロゾルの前駆体に関する最新の研究を取り上げ，エアロゾル研究の現状と今後の展望・問題点について議論を行う。エアロゾルとその前駆体に関連する研究発表を広く募る。

コンピナー：河村公隆（北海道大学），鈴木 款（静岡大学）

課題講演 - 3 地下生物圏の地球化学

趣旨：堆積物中や熱水周辺などにおける微生物の存在

が知られるようになり地下生物圏における生物の役割が注目されている。IODP（統合海洋掘削計画）においても，重要な研究課題となっている。これらの生物活動の記録を地球化学的手法でどのように明らかにすることができるのか？ 地層に残る過去の歴史を明らかにする上でも，地層浅部の間隙水を含めた地球化学的研究の果たす役割は大変に大きい。今後の展望を探る上で，多くの講演を期待する。
コンピナー：北里 洋（IFREE 4, JAMSTEC），和田秀樹（静岡大学）

課題講演 - 4 海洋の微量元素・同位体マッピングによる生物地球化学サイクルの解明

趣旨：1970年代に海洋の物質循環研究に革新的成果を収めた GEOSECS（Geochemical Ocean Sections Study：地球化学的大洋縦断研究）計画の第二フェーズが，新たに国際共同 GEOTRACES 計画としてまさに動き始めた。本課題討論では，GEOSECS 当時には技術的に分析が不可能だった海水中の微量元素・同位体に関わる最新の生物地球化学的研究について，沿岸域から外洋域まで，また海洋表層から深海底まで幅広くとりあげ，今後の動向と問題点について議論する。

コンピナー（予定）：蒲生俊敬（東大海洋研），張 勁（富山大理）

一般講演会発表形式：

口頭発表：討論を含め15分。多くの方が発表できるように，1人1件といたします。2件目からは，ポスターセッションに申し込み願います。

ポスターセッション：ポスター面積は，横90 cm × 縦120 cm，9時～16時，コアタイムは，13時～14時。

総会：9月21日(火) 14:00～15:00

学会賞受賞講演：9月21日(火) 15:00～17:00

懇親会：9月21日(火) 18:00～20:00

場所：静岡大学生協 第2食堂

参加登録費，懇親会参加費等

1. 参加登録費（講演要旨集1部と送料を含む）予約申込は2004年9月1日まで

会員：5,000円，学生会員：3,000円，会員外：7,000円，会員外学生：4,000円

当日受付：会員：6,000円，学生会員：4,000円，

会員外：8,000円，会員外学生：5,000円

2. 懇親会参加費 予約申込は2004年9月1日まで
会員/会員外：5,000円，学生会員/会員外：
3,000円，当日：会員/会員外：6,000円，学生会
員/会員外：4,000円
3. 講演要旨集（当日販売）：3,000円/部（郵送の場
合：3,500円/部）
4. 参加登録費，懇親会参加費，講演要旨集代金の支
払い方法

参加申し込みをいただいた後，静岡大学生協から請
求書と郵便振り替え用紙をお送りいたします。所定の
日時までに郵便振替にて送金してください。（郵便振
替受領書をもって領収書といたします。別途領収書を
必要とする場合，大会当日に受付に申し出てください
）

郵便振替口座：00810 1 98569

加入者名：静岡大学生協同組合予約注文センター

参加申込等の締切等

講演申込締切：2004年6月30日(水) 14:00，

開始は6月9日(水) 14:00

講演要旨の締切：2004年8月4日(水) 14:00，

開始は7月21日(水) 14:00

参加予約申込の締切：2004年9月1日(水) 14:00

講演申込および要旨受付方法：講演の申込，および，
講演要旨の原稿受付は，インターネットホームペ
ージ上からの受付に限らせていただきます。両者と
も，日本地球化学会ホームページ（[http://www.
geochem.jp](http://www.geochem.jp)）または，年会ホームページ（[http://
www.shizuoka.ac.jp/s4nenkai](http://www.shizuoka.ac.jp/s4nenkai)）より年会の講演申
込，及び講演要旨の受付をクリックし，科学技術振
興機構（JST）のJ-STAGEに置かれている所定の
書式（PDF形式，講演要旨の容量は300KB程度）
に従って送信してください。講演要旨の書き方は，
年会ホームページをご覧ください。受付開始および
終了は日時その他，時間も設定されておりますので，
ご注意ください。なお，ホームページからの申込が
困難な場合は，下記の年会お問い合わせ先に，**締切
の1週間前までに**問い合わせください。

参加申込方法：参加申込は，日本地球化学会ホーム
ページまたは，年会ホームページより，年会の参加
予約申込の仕方にアクセスして，参加予約申込書

（本ニュースに添付のものをコピー，あるいは
PDF形式のファイルをダウンロード）を用いて，
ファックスで生協に申し込んでください。

上記の申込書を使って，旅行・宿泊の手配を静岡大
学生協に依頼をすることができます。なお，静岡市内
のホテル/旅館等をご利用いただくと，静岡市から主
催者に補助金が支払われます。公共の宿泊施設（生協
を通して申込んだ方を除く）をご利用いただいた方
は，宿泊アンケート用紙に必要事項を記入し，会場に
設けたポストに投函してください。用紙は，請求書と
ともにお送りする他に，会場での受付の時お渡しいた
します。ご協力をお願いいたします。

保育室：乳幼児・児童を同伴する大会参加者のため
に，大会会期中，保育室を設けます。ご希望の方
は，参加予約申込書に必要な項目を記入の上，お送
りください。保護者同伴でベビーシッターを頼まず
に部屋の使用を希望する方もご相談下さい。

お弁当：会期中，昼食のお弁当の申込ができます。ご
希望の方は，参加予約申込書に必要な項目を記入の
上，お送りください。

年会問い合わせ先：

〒422 8529 静岡市大谷836

静岡大学理学部生物地球環境科学科内

日本地球化学会2004年会準備委員会

和田秀樹 WADA, Hideki（準備委員長）

Tel: 054 238 4791, Fax: 054 238 0491

E-mail: sehswada@ipc.shizuoka.ac.jp

石川剛志 ISHIKAWA, Tsuyoshi（情報担当）

Tel: 054 238 4801, Fax: 054 238 0491

E-mail: setishi@ipc.shizuoka.ac.jp

サティッシュ=クマール エム.

SATISH-KUMAR M.（経理/会場）

Tel: 054 238 5084, Fax: 054 238 0491

E-mail: smsatis@ipc.shizuoka.ac.jp

静岡大学生協同組合年会担当係 青木康典

Tel: 054 237 1160, Fax: 054 237 8440

E-mail: y-aoki@coop.shizuoka.ac.jp

講演申込・講演要旨受付 米田成一・小林貴之

Tel: 03 3364 7142, Fax: 03 3364 7104

E-mail: nenkai2004@geochem.jp

地球化学会からのお知らせ 会費滞納者の取り扱いの変更

日頃から地球化学会の活動に参加いただき有難うございます。

地球化学会ではこれまで会費滞納の会員に対して会費支払をお願いするとともに、5年以上滞納の会員は評議員会の議決を経て除名させていただきました。2003年第2回の評議員会で、このルールが変更になり、2年以上の滞納者は除名されることになりました。

このニュースをお読みの方々は、会費を適正に納入されている会員であると存じますが、身近に会費の納入を忘れていた会員がいる場合、ルールが変わったことを注意していただければ幸いです。

地球化学会では、“Geochemical Journal”、“地球化学”、地球化学講座などの出版、年会の開催だけでなく、鳥居基金などの各種助成事業を行っています。またGoldschmidt国際会議の主催団体に加わり、本会会員は割引料金で登録ができる特典もあります。今後も、会の活動に積極的に参加していただくようお願いいたします。

地球化学会会長 田中 剛
会員幹事 中井俊一

2004年度第2回鳥居基金助成の募集について

2004年度第2回鳥居基金助成の応募の締め切りは2004年7月末日となります。本学会ホームページに応募要項がありますので、ご参照の上、応募書類を提出して下さい。なお今回の助成の対象は、2004年10月から2005年9月までの1年間に実施される海外渡航及び国内研究集会となりますのでご注意ください。

申請手続：応募者は、Vol 37特別号108, 109ページに掲載されている申請書(1) - Aまたは(1) - B)を所定の期日までに日本地球化学会に提出する。参考となる資料(海外派遣については業績リストおよび学会参加の場合は学会概要等、国内研究集会については集会の案内・概要等)があれば添付すること。

提出先：〒113 8622 東京都文京区本駒込5 16 9

(財)日本学会事務センター内

日本地球化学会鳥居基金委員会

なお本件に関する問い合わせは庶務幹事(下記)まで。

山本鋼志

〒464 8602 名古屋市千種区不老町

名古屋大学大学院環境学研究科地球環境科学専攻

Tel : 052 789 2522 , Fax : 052 789 2522

E-mail: shomu@geochem.jp

CALL FOR PROPOSALS FOR SYMPOSIA FOR GOLDSCHMIDT 2005

Proposals for symposia/special sessions for the 2005 Goldschmidt Meeting in Moscow, Idaho, U.S. A. are now being soliciting. A number of broad themes for the meeting has been identified and an International Program Committee (IPC) has been appointed (see the website <http://www.uidaho.edu/gold2005> for details). The IPC consists of a chairperson (Peter Larson; plarson@wsu.edu) and at least two international representatives for each theme. The IPC will evaluate each proposed symposium to minimize overlap and insure broad coverage of the themes. To propose a symposium, please contact either the IPC Chair or one of the appropriate thematic representatives (again, see the conference website for contact information). The proposal can be as simple as an e-mail giving the title of the proposed symposium, a brief statement of the relevance and expected interest level, and the names of potential organizers/session chairs of the symposium (who will solicit papers from appropriate contributors). We will entertain proposals even if they do not appear to fit under any of the highlighted themes. Proposals for symposia/special sessions will be accepted for consideration up until September 1, 2004. However, submission of proposals as soon as possible is advised.

International Program Committee for Goldschmidt 2005

In order to insure a program of broad, international interest, we have identified the following themes for Goldschmidt 2005, with the indicated international Thematic Representatives. We are soliciting ideas for symposia/special sessions under these and other topics. If you have an idea for a symposium/special

session and/or are interested in organizing such a session, please contact the appropriate thematic representatives or e-mail: gold2005@uidaho.edu.

Chair of the International Program Committee
Peter Larson, Washington State University (plarson@wsu.edu)

<Themes and Thematic Representatives>

Advances in analytical geochemistry

Detlef Guenther, ETH, Zürich (guenther@inorg.chem.ethz.ch)

Mark Rehkamper, ETH, Zürich (markr@erdw.ethz.ch)

<Analytical Methods in Mineralogy>

Lee Groat, University of British Columbia (lgroat@eos.ubc.ca)

<Applications of microanalytical techniques>

Adam Kent, Oregon State University (adam.kent@science.oregonstate.edu)

Ed Vicenzi, Smithsonian Institution (vicenzi@volcano.si.edu)

<Aqueous geochemistry>

Jonathan Icenhower, Pacific Northwest National Laboratory (Jonathan.Icenhower@pnl.gov)

Roland Hellmann, LGIT, Grenoble (Roland.Hellmann@obs.ujf-grenoble.fr)

David Wesolowski, Oak Ridge National Laboratory (dqw@ornl.gov)

<Atmosphere, past and present>

Maureen Conte, Wood's Hole Oceanographic Institute (mconte@whoi.edu)

Kimitaka Kawamura, Hokkaido University (kawamura@lowtem.hokudai.ac.jp)

<Biogeochemistry>

Yoko Furukawa, Naval Research Laboratory (yoko.furukawa@nrlssc.navy.mil)

Carla Koretsky, Western Michigan University (carla.koretsky@wmich.edu)

Patricia Maurice, Notre Dame University (pmaurice@moe.debartolo.nd.edu)

<Chemical geodynamics>

Janne Blichert-Toft, Ecole Normale Supérieure de Lyon (Janne.Blichert-Toft@ens-lyon.fr)

Louise Kellogg, UC Davis (kellogg@ymir.ucdavis.edu)

Rich Walker, University of Maryland (rjwalker@geol.umd.edu)

<Crystallography>

Thomas Armbruster, University of Bern (thomas.armbruster@krist.unibe.ch)

Nancy Ross, Virginia Tech (nross@vt.edu)

<Environmental geochemistry>

David Blowes, University of Waterloo (blowes@sci-borg.uwaterloo.ca)

<Environmental mineralogy>

David Bish, Indiana University (bish@indiana.edu)

Rod Ewing, University of Michigan (rodewing@umich.edu)

<Experimental Petrology/geochemistry>

Malcolm Rutherford, Brown University (Malcolm_Rutherford@brown.edu)

<Fluids and rocks in the crust>

Dave Cole, Oak Ridge National Laboratory (coledr@ornl.gov)

Barb Dutrow, Louisiana State University (dutrow@geol.lsu.edu)

Alan Matthews, Hebrew University of Jerusalem (alan@vms.huji.ac.il)

<Geochronology>

Trevor Ireland, Australia National University (Trevor.Ireland@anu.edu.au)

Randy Parrish, University of Leicester (rrp@nigl.nerc.ac.uk)

Pete Reiners, Yale University (peter.reiners@yale.edu)

<Geomicrobiology>

Johnson Haas, Western Michigan University (jhaas@wmich.edu)

Bo Barker Jorgensen, Max Planck Institute (bjoergen@mpi-bremen.de)

Gordon Southam, University of Western Ontario (gsoutham@uwo.ca)

<Global change>

Jess Adkins, Caltech (jess@gps.caltech.edu)

Fred Mackenzie, University of Hawaii (fredm@iniki.soest.hawaii.edu)

<Heavy-element stable isotope geochemistry>

Ariel Anbar, University of Rochester (anbar@earth.rochester.edu)

Albert Galy, University of Cambridge (albert00@esc.cam.ac.uk)

<Humic substances>

Paul Bloom, University of Minnesota (pbloom@soils.umn.edu)

Yona Chen, The Hebrew University of Jerusalem (yonachen@agri.huji.ac.il)

<Interface geochemistry/mineralogy>

Don Sparks, University of Delaware (dlsparks@udel.edu)

Garrison Sposito, UC Berkeley (gsposito@nature.berkeley.edu)

<Mathematical modelling>

Andrey Kalinichev, University of Illinois (kalinich@uiuc.edu)

David Sherman, University of Bristol (dave.sherman@bristol.ac.uk)

<Nanogeoscience>

Mike Hochella, Virginia Tech (hochella@vt.edu)

David Vaughan, University of Manchester (david.vaughan@man.ac.uk)

<Oceans, past and present>

Gary Klinkhammer, Oregon State University (gklinkhammer@coas.oregonstate.edu)

Greg Ravizza, University of Hawaii (ravizza@hawaii.edu)

<Ore deposits>

Greg Arehart, University of Nevada-Reno (arehart@mines.unr.edu)

Chris Gammons, Montana Tech (cgammons@mtech.edu)

Terry Seward, ETH, Zürich (tseward@erdw.ethz.ch)

A. E. Williams-Jones, McGill University (willyj@eps.mcgill.ca)

<Organic geochemistry>

Ken Anderson, Argonne National Laboratory (kanderson@geo.siu.edu)

Kate Freeman, The Pennsylvania State University (kate@essc.psu.edu)

Graham Logan, Geoscience Australia (Graham.Logan@ga.gov.au)

<Origin of Life/Life in Extreme Environments>

Bob Hazen, Carnegie Institution (r.hazen@gl.ciw.edu)

Tatsushi Murae, Kyushu University (murae@geo.kyushu-u.ac.jp)

Mitch Schulte, NASA Ames Research Center (mschulte@mail.arc.nasa.gov)

<Planetary materials & Cosmochemistry>

Michael Drake, University of Arizona (drake@lpl.arizona.edu)

Frank Podosek, Washington University (fap@levee.wustl.edu)

<Radiogenic isotope geochemistry>

Rick Carlson, Carnegie Institution (carlson@dtm.ciw.edu)

Jonathan Patchett, University of Arizona (patchett@geo.arizona.edu)

Simon Turner, Macquarie University (sturner@els.mq.edu.au)

<Regional geochemistry/mineralogy>

Robert Fleck, USGS, Menlo Park (fleck@usgs.gov)

<Synchrotron radiation: Techniques and applications>

Scott Fendorf, Stanford University (fendorf@stanford.edu)

Alain Manceau, LGIT, Grenoble (Alain.Manceau@obs.ujf-grenoble.fr)

<Teaching mineralogy & geochemistry>

Darby Dyar, Mt. Holyoke College (mdyar@mtholyoke.edu)

Local Program Committee

<Analytical Geochemistry/Mineralogy>

Frank Ramos, University of California at Santa Cruz (framos@es.ucsc.edu)

Tom Williams, University of Idaho (tomw@uidaho.edu)

<Aqueous Geochemistry>

Scott A. Wood, University of Idaho (swood@uidaho.edu)

<Biogeochemistry/Geomicrobiology>

Susan Childers, University of Idaho (childers@uidaho.edu)

Matt Morra, University of Idaho (mmorra@uidaho.edu)

edu)

<Chemical Geodynamics/Radiogenic Isotope Geochemistry/Geochronology>

Dennis Geist, University of Idaho (dgeist@uidaho.edu)

Bill McClelland, University of Idaho (wmcclell@uidaho.edu)

Jeff Vervoort, Washington State University (vervoort@wsu.edu)

<Fluids in the Crust/Stable Isotope Geochemistry>

Peter Larson, Washington State University (plarson@wsu.edu)

<Geomathematics>

Monte Boisen, University of Idaho (boisen@uidaho.edu)

<Humic Substances>

Ray von Wandruszka, University of Idaho (rvw@uidaho.edu)

<Interface Geochemistry/Mineralogy>

Dan Strawn, University of Idaho (dgstrawn@uidaho.edu)

<Mineralogy>

Nick Foit, Washington State University (foit@mail.wsu.edu)

Mickey Gunter, University of Idaho (mgunter@uidaho.edu)

<Planetary Materials & Cosmochemistry>

Leslie Baker, University of Idaho (lbaker@uidaho.edu)

日本学術会議からのお知らせ

第19期日本学術会議は、第4部が中心になって「若者の理科離れ問題特別委員会（委員長、北原和夫第4部会員）」を設け、学術会議全体でこの問題に取り組んでいます。そこでの検討の結果、学術と社会との対話に日本学術会議が率先して取り組む必要性を認識し、その姿勢を示すため、去る4月20日に開かれた総会で添付の日本学術会議声明を採択しました。また、5月21日には、「科学・技術への理解と共感を醸成するために」と題する公開講演会を、茂木科学技術政策担当大臣、河村文部科学大臣の両大臣もお招きして、開催することになりました。そのプログラムを添付します。

社会との対話に取り組もうとする日本学術会議の決

意を、広く一般の科学者にご理解いただきたいと思います。それに向けて、まずは、5月21日のシンポジウムに多くの科学者の方々が参加して下さることを希望しています。

声明「社会との対話に向けて」

日本学術会議，2004年4月20日

我々日本学術会議は、科学者と社会が互いに共感と信頼をもって協同することなくして、いかなる科学研究も生命感の漲る世界を持続させることができないことを認識する。さらに、我々は、科学研究は、社会が享受すべき成果をもたらす反面、社会に対する弊害を引き起こす恐れがあるという正負両面があることを、科学者も社会も明確に理解すべきであると認識する。

このような認識に立ち、我々は、科学者が社会と対話をする事、特に人類の将来を担う子どもたちとの対話を通して子どもたちの科学への夢を育てることが重要であると考えます。

我々日本学術会議は、これから科学者と社会がしっかりと手をつないでいくことを推進する。まず、日本学術会議は、子どもたちをはじめとするあらゆる人々と科学について語り合うように、全ての科学者に呼び掛ける。また、日本学術会議は自ら、科学に対する社会の共感と信頼を醸成するために、あらゆる可能な行動を行う。

日本学術会議主催公開講演会

科学・技術への理解と共感を醸成するために

日時：平成16年5月21日(金)

13:00～18:00（開場12:00）

会場：日本学術会議 講堂

主催：日本学術会議

共催：内閣府、文部科学省、経済産業省、日本経済団体連合会、日本科学技術ジャーナリスト会議

協賛：メディア教育開発センター

総合司会：北原和夫 日本学術会議会員、若者の理科離れ問題特別委員会委員長

挨拶：茂木敏充 科学技術政策担当大臣（予定）

河村建夫 文部科学大臣（予定）

第1部 講演 13:15～15:15

「なぜ、いま、ここに？」

黒川 清 日本学術会議会長

「とくに人材の育成について」

阿部博之 日本学術会議会員，総合科学技術会議
議員

「社会と理科離れ」

白川英樹 筑波大学名誉教授，2000年ノーベル化
学賞受賞

「産業界の視点から見た理科教育の在り方」

吉野浩行 日本経済団体連合会副会長，本田技研
工業株式会社取締役相談役

「科学者へ望むこと」

高橋真理子 日本科学技術ジャーナリスト会議副
会長，朝日新聞論説委員

「科学技術・理数教育の新たな展開」

有本建男 文部科学省科学技術・学術政策局長

第2部 パネル・ディスカッション 15:30~18:00

司会 室伏きみ子 日本学術会議会員

パネリスト(五十音順)

井上和子 日本学術会議会員

川合知二 大阪大学産業科学研究所教授

北沢宏一 科学技術振興機構理事

倉持隆雄 文部科学省科学技術・学術政策局基盤
政策課長

黒田玲子 総合科学技術会議議員，東京大学大学
院総合文化研究科教授

佐々木和枝 お茶の水女子大学附属中学校副校長

嶋田実名子 花王株式会社広報部門社会・文化グ
ループ部長

高橋真理子 日本科学技術ジャーナリスト会議副会
長，朝日新聞論説委員

本間典子 東京大学大学院医学系研究

申込先：

日本学術会議事務局総務部庶務課

〒106 8555 東京都港区六本木7 22 34

Tel : 03 3403 1906 , Fax : 03 3403 6224

E-mail: info@scj.go.jp

URL: http://www.scj.go.jp/

**2003年度第2回「鳥居基金」
助成実施報告書(TE 36)**

氏名：原田尚美 (JAMSTEC)

助成：研究集会

課題：第3回地球システム・地球進化ニューイヤー
スクール(NYS) 報告

2004.2.25 原田尚美・坂本竜彦作成

1. はじめに

2004年1月に開催した第3回スクールは，今年度の
日本地球化学会「鳥居基金」の援助があって盛会に開
催することができました。ここに事務局を代表しまし
て，心よりお礼を申し上げます。尚，企画全体につい
ては以下のWWW ページをご参照ください。

URL: [http://www.ep.sci.hokudai.ac.jp/~earth/school/
2003/index.html](http://www.ep.sci.hokudai.ac.jp/~earth/school/2003/index.html)

2. NYS 発足の経緯と目的

地球化学，古海洋学，生物地球科学，岩石学，堆積
学，固体地球物理学などの分野の若手中堅研究者有志
の間で「21世紀の地球科学を考える会」を2001年に発
足させた。この会の活動主旨は，1) 明確な研究目標
と問題意識をもって広い分野を包括し，社会の要望も
見つめながら，研究プロポーザルを作り実行していく
資質，2) 輸入型サイエンスではなく日本が世界を
リードするようなサイエンスを生み出す資質，3) 海
外の研究者と互角に渡り合える資質等を備えた，次世
代を担う若手研究者や学生の育成にある。そこで，全
国の若手研究者，院生，学生を集めて「地球システ
ム・地球進化ニューイヤースクール(NYS)」を21世
紀の地球科学を支える若い世代の交流・学習の場とい
う位置づけで開催してきた。

我々地球科学の研究者たちの研究対象は地球であ
る。この巨大で複雑な「システム」の過去から現在そ
して未来にいたる「進化」を研究している。これから
の地球進化・地球システムを理解していくには，特定
の分野の視野のみではなく，広い視座と先鋭化された
専門性の両面を持つことが不可欠である。専門性をこ
のような短期間のスクールで養うことは不可能であ
り，大学等研究・教育機関での地道でねばり強い研究
と教育に任せるものの，スクールの主目的は，広い視
座を養うことと自分の専門ではない分野の基礎知識や
自分の専門分野の最新的话题を集中的に教授すること
にある。また，もう一つの重要な目的は“場”の提供
である。スクールの参加に年齢制限はない。様々な興
味と専門をもつ研究者たちが，分野の垣根をこえて交
流し，今後の日本のサイエンスをより発展させていく
ために，今後何を研究すべきかという目標を見つけ，

討論する場であること、それがスクールの持つ重要な目的、意義である。

3. NYS 企画概要

第3回 NYS は、2004年1月6日～7日につくばで行われた。本企画主催は「21世紀の地球科学を考える会」であり、固体地球統合フロンティア研究システム地球システム変動領域、産業技術総合研究所、海洋資源環境研究部門、高知大学海洋コア研究センター、海洋科学技術センターむつ研究所、日本海洋岩石学会の各機関が共催し、日本地球化学会（鳥居基金）、日本地球掘削科学コンソーシアム（J-DESC）の後援により開催された。

参加者総数は178名（職員82名（46%）、PD 15名（8%）、学生総計81名（46%））であった。学生内訳は博士院生33名（19%）、修士院生31名（17%）、学部生17名（10%）、男女比内訳は、男141名（79%）、女37名（21%）であった。参加登録者の専門分野については、古海洋学など「古（paleo）」がつく専門分野だけではなく、現代海洋、モデルなど多方面に渡り、全国106の機関から、80以上の異分野や様々な階層が参加した。このことは、次世代の地球科学者を生み出す温床として、専門分野別の学会にはない、重要な役割を果たしているだろう。

レクチャーは、スクールのメインテーマを「Earth, Ocean, and Life」とし、「基礎レクチャー（各分野の基本事項を徹底的に押さえる）」、「最先端レクチャー」、「総合レクチャー」の3つのカテゴリーで構成した。現代海洋学、IODPの科学プランや、IMAGES/PAGESなどの第四紀の気候変動関係、モデル、固体地球物理系のレクチャーなど、基礎から最先端の話題まで包括的に勉強できるような内容とした。時間は講師1人あたり30分～1時間で、質問・議論の時間を十分にとった。

具体的なレクチャーの内容であるが、地球システム変動に関しては、「物質循環のしくみをよく理解すること」というのが今回の基本点である。「現代の地球システム変動」と「近過去の地球システム変動」という2本立てにし、「全般論」と「各論」で「大気循環」「海洋循環」「生物生産」を現代と過去で対応させて、時間スケールによって変動の要因となるものが異なることなどを理解ができるように構成した。また、この両者を結びつける視点と方法を理解するため、数値モデリングによる、長時間スケールの大気中の二酸化炭素の変化に海洋がいかに応答するのか、というレ

クチャーを企画し、NYSではじめて海外から講師を招いた。「現代海洋」「古海洋・古気候」「数値モデル」は三位一体となって、はじめて地球システム・地球進化の研究となるという視座を獲得してもらえたのではないかと思う。

次に、地球表層と内部がどう連関して地球が進化してきたのかを理解するために、地球表層関連では「地球史における地球システム変動と進化」と「地球システムにおける生物圏の広がりと機能」というレクチャーを、固体地球内部物質循環については、海洋リソフェアの基礎、巨大岩石区（Large Igneous Provinces: LIPs）岩石学、地球マントル中での水・二酸化炭素の循環、地震発生帯に関わるレクチャーを企画した。地球内部と地球表層のインタラクションについて、46億年という長い時間スケールの中で地球システムの進化を総括的に理解するためには、地球表層現象（気候変動など）と固体地球物質循環という2つの分野について、互いに互いの存在と重要性を認識している必要がある。この企画により、気候変動・生命圏の研究者と固体地球研究者が互いの分野の連携の重要性を認識できたことと思う。

今回のスクールでは、参加者から、「他分野の知識を身に付け、専門分野にとらわれない独創的な発想力を養いたい」、「地球規模のスケールの循環システムを理解することで、自分の研究分野の意義を再度認識したい」といった声が、特に博士院生や常勤職の助教授・助手層から寄せられた。また、講義内容を教科書として残すためにレクチャーノートとして参加登録者に事前に配付し、さらにNYSを多くの方に知ってもらうために、「号外No.44 月刊地球特集号」として出版した（2004年2月15日発行）。

開催期間中、喫茶コーナーに展示スペースを用意し、国内、国際研究プロジェクトの紹介、各研究・教育機関の紹介、各研究室の紹介、大学院生等の募集、共同研究の呼びかけを行った。また、子どもを持つ研究者のための育児室を設けた。

サイエンスを取り巻く環境を考えるために「サイエンスとともに生きる」をテーマに事前アンケートや夜間セッションを企画した。IODPや各種国際・国内プロジェクトへの若い学生・院生の積極参加を願う推進側の意図とは裏腹に、先の二回のNYSを通して「将来に夢を持ってない」、「展望をもてない」といった学生や若手研究者の声がかきつけである。セッションでは様々な形で将来サイエンスに関わりたい、あるいは既

にサイエンスを仕事としている人が感じる諸問題（やりがいや日常生活など）について発表してもらい、それについて討論する時間を設けた。「サイエンスとともに生きる」アンケートの集計結果の全容は、月刊地球号外44号、21世紀地球科学の会のホームページで公表している。

4. 実施体制

21世紀の地球科学を考える会コアメンバーを中心に、スクール開催事務局を構成。事務局は、全体統括、つくば事務局、基本レクチャー・アドバンスレクチャー企画部、アドバイザーの4部構成。

●全体統括

▶坂本竜彦@IFREE 4/JAMSTEC (NYS 責任者), 原田尚美@MIO/JAMSTEC (NYS 会計, 本申請者), 池原実@高知コアセンター (NYS 監査)

●つくば事務局

▶大串健一郎 (現地責任者) @ AIST , 中島礼@ AIST・PD, 大村亜希子@AIST・PD

●レクチャー企画部

▶黒田@海洋研・院生, 吉田@北大・理 (院生), 吉山@北大・理 (院生), 田辺@北大・理 (院生), 飯島@北大・理 (院生), 中島@北大・理 (院生), 萩野@名大・PD , 渡辺@海洋研・PD , 堀 @ AIST・PD, 青木@AIST, 入野@北大・地球環境研, 沢田@北大・理, 佐藤@専修大, 小埜@北海道区水産研究所, 村山@高知コアセンター, 中川@京大・理・地球熱学, 阿波根@ MIO / JAMSTEC, 木元@MIO/JAMSTEC, 内田@MIO, WHOI/JAMSTEC, 金松@DSR/JAMSTEC, 阿部@DSR/JAMSTEC, 廣野@DSR/JAMSTEC, 金松@DSR/JAMSTEC 斎藤@DSR/OD 21/JAMSTEC, 大河内@IFREE 4/JAMSTEC, 伊藤@IFREE 4/JAMSTEC, 平野 @ IFREE 4/JAMSTEC, 山口@ IFREE 4 / JAMSTEC, 千秋@IFREE 4/JAMSTEC, 小川@ IFREE 4 / JAMSTEC, 小栗@IFREE 4 / JAMSTEC, 松本@IFREE 4/JAMSTEC, 久光@ IFREE 4/JAMSTEC, 坂井@IFREE 4/JAMSTEC, 菅@IFREE 4/JAMSTEC, 江口@iSAS, 花田@OD 21/JAMSTEC, 西川@OD 21/AESTO

●アドバイザー

▶川幡穂高@AIST, 北里洋@IFREE 4/JAMSTEC, 池原研@AIST

5. 成果物・出版物

●NYS レクチャーノート (2003年12月発刊): NYS 参加者に配布

●海洋出版(株)月刊地球号外44号 (2004年2月15日発刊): NYS レクチャー特集。一般購入可

●海と地球の情報誌 “Blue Earth” (海洋科学技術センター発刊, 2004年3 / 4月号)に NYS 特集ページ

第19期海洋科学研究連絡委員会

(第1回) 議事録

日時: 平成15年12月2日(火) 14時~17時

出席者: 谷口旭, 蒲生俊敬, 竹内謙介, 山口征矢, 池田元美, 伊藤絹子, 前田明夫, 古谷研, 灘岡和夫, 植松光夫, 新野宏, 北村佳照, 中田薫
オブザーバー: 木暮一啓 (東大海洋研究所)

欠席者: 寺崎誠, 松田治, 松山優治, 川辺正樹, 友定彰, 佐藤義夫, 徐 垣

場所: 日本学術会議 第4部会議室

・第19期海洋科学研究連絡委員会発足にあたって

1. 第19期海洋科学研究連絡委員会発足世話人である委員長の谷口旭会員より, 本研連の性格と新委員選任の方針について簡単な説明がなされ, 続いて第19期委員長の互選に入り, 谷口会員を再選した。

2. 谷口委員長の挨拶, 出席委員の自己紹介の後, 次の4幹事を選出した。

中田薫 (生物系), 蒲生俊敬 (化学系), 北村佳照 (物理系), 伊藤絹子 (代表幹事)

・協議事項 - 1

東京大学海洋研究所研究船の移管後の運用体制について

報告事項に入る前に木暮一啓氏 (東大海洋研究所) から, 東京大学海洋研究所の研究船「白鳳丸」と「淡青丸」を海洋科学技術センター (JAMSTEC) を改組して作る独立行政法人海洋研究開発機構に移管することについて, 現状の報告と本委員会に対する検討依頼があった。これまで, 新体制の下における研究船の運航および乗組員の処遇の2項目について協議するため, 海洋研究所, 東大本部, JAMSTEC, 文部科学省海洋地球課, 同学術機関課の5者間に「研究船移管協議会」を設けて協議を重ねてきたこと, また, 共同利用の趣旨に基づく研究船の運行を維持する仕組みが構築されつつある旨の

報告があった。その上で、新しく研究船共同利用運営委員会（仮称）を海洋研究所に置くにあたって、海洋科学研究連絡委員会から委員推薦等に協力願いたいという要望が表され、委員会はこれを了承した。

・報告事項

- 1．第18期研連からの申し送り事項について
委員長より、第18期から第19期への申し送り事項（次の4項目）について説明があり、第19期研連はこれを引き継ぐこととした。

海洋の物理学、化学、地質学、生物学、環境学にわたる研究と教育の振興について、引き続き審議する。

SCOR (Scientific Committee on Oceanic Research: 海洋研究科学委員会) の国内対応体としての責務を果たす。

我国における海洋科学の研究と教育の推進体制確立について審議し、その成果を研連報告として取りまとめるよう務力する。

新生日本学術会議の活動に貢献できる研連をめざして、海洋科学研究連絡委員会の将来計画を検討する。

- 2．日本学術会議の報告（谷口委員長）

「日本学術会議の在り方について」総合科学技術会議から政府に意見が具申された。日本学術会議自体の改革推進委員会としても「在り方」の具体化案を鋭意検討している。その内容は、これまでに報告されていたものと大きく変わってはならず、会員数は現行の210名を基本として、部の構成を現行の7部制から3部制（人文社会系、生物生命系、理工系）へ改組する。会員および連携会員の定年を70歳と定め、任期を現行の3年から6年へ変え、3年ごとに半数改選する。初回の会員は、日本学術会議会員選考委員会を時限設置して選考し、その3年後の二回目以降は、co-optation の理念に基づいて会員が新会員を選考する。現行の研連委員の予算定数を基本として2,370名の連携会員を任命し、全廃される研究連絡員会に替わって設けられる「課題別委員会（仮称）」での審議にあたる。

第19期には、上述の改革基本方針を具体化する実施案の策定が大きな役割になると予想される。政府がそれをどれほど尊重するかは不明であるが、それを受けて法改正に臨むことは間違いないと予想さ

れ、法改正が終了すれば第19期は任期途中で解散し、ただちに新制度の下で第20期の会員を選任して、新しい学術会議へと移行する見通しである。その時期は、現時点では、2004年7月あるいは2005年3月と予想されている。

- 3．海洋研究科学委員会（SCOR）（谷口委員長）

SCOR 副会長である谷口委員長より、9月モスクワで開催された第36回執行理事会の報告があった。詳細は近く「海の研究」に寄稿される予定。

・協議事項 - 2

- 1．第19期の活動方針について

前に報告された第18期研連からの申し送り事項を了承し、これを今期の活動方針とすることを承認した。

- 2．科学研究費補助金審査委員推薦について（谷口委員長）

学術体制常置委員会科研費分科会から、今後の科学研究費補助金審査委員候補者については、日本学術会議はこれを推薦するのではなく、候補になりうる科学者のリストを作って日本学術振興会に提供するに留まることになる旨報告があったこと、また、平成17年度科学研究費補助金審査委員候補者推薦にかかわる分科細目別の対応研連の見直しと、平成18年度科学研究費補助金細目のキーワード見直しの2点について、研連としての意見が求められているとの説明があった。これに関して意見が交換され、本研連が申請した細目「海洋科学」は不採択となり、代わりに分科「環境学」細目「環境動態解析」にキーワード「化学海洋」「生物海洋」が新設されたが、それが却って混乱を招いていることが問題になった。その原因の一つが、学術振興会がキーワード別の申請および採択件数の統計を公表していないことにあるので、その公表を要望することとした。意見の提出締め切りが1月23日になっているので、さらにメールで意見を募ることを了承した。

- 3．SCOR の新 Nominated Members について

2004年以降の新 Nominated Members の選出を計り、池田元美委員（物理）と蒲生俊敬委員（化学）を選出した。なお、2003年までの前任者は平啓介（物理）、角皆静男（化学）、谷口旭（生物）であった。谷口委員は2004年まで SCOR 副会長に任命されているので、今回改選の対象にはならない。

- 4．国際学術交流事業平成16（2004）年度代表派遣候

補者について

SCOR 総会が2004年9月にヴェニスで開催される予定である。SCOR 副会長である谷口委員の旅費は SCOR から支給される見通しなのであり、また、同総会には IAPSO 会長である今脇資郎氏（物理）が出席することになっているので、今回の派遣候補者には化学担当の蒲生俊敬委員を推薦することとした。昨年、一昨年と2人ずつ推薦してきたので、外に希望があればメールで委員長宛てに申し出ることとした。

5. 第4回国際極年(IPY 4)について(谷口委員長)

国際科学会議より日本学術会議宛てに照会のあった「第4回国際極年(IPY 4, 2007/2008年)に関する依頼」について、極地研究連絡委員会が作成した回答文案の紹介があった。学術会議の方針では、極地研連を中心にして積極的に対応してゆくことになっているので、本研連も関心を持って見守り、協力してゆくこととした。

6. 東京大学海洋研究所協議会委員の推薦について

東大海洋研究所長から推薦依頼があった平成16・17年度協議会委員候補者を、以下のように選出した。

平成14・15年度から留任することを推薦する候補者

乗木新一郎 北海道大学大学院地球環境科学研究科 教授

松山優治 東京海洋大学海洋科学部 教授

井内美郎 愛媛大学沿岸環境科学研究センター 教授

福地光男 国立極地研究所 教授

井関和夫 独立行政法人水産総合研究センター
瀬戸内海区水産研究所 部長

新たに推薦する候補者

池田 勉 北海道大学大学院水産学研究科 教授

北里 洋 認可法人海洋科学技術センター地球システム変動研究領域領域長

久保田雅久 東海大学海洋学部 教授

才野敏郎 名古屋大学地球水循環研究センター 教授

今回は1月26日、27日いずれかの日程で開催の予定(その後26日に決定)

日本学術会議惑星科学研究連絡委員会 (第19期第1回)議事録

日時: 2004年1月27日(火) 13:30~16:30

場所: 日本学術会議5階会議室

出席者: 阿部, 井田, 大谷, 香内, 土山, 寺沢, 中村, 松井, 向井, 坂本, 山本(文責)

欠席: 中川, 藤井, 水谷

報告・議題

1) 委員長と幹事の選出

委員長: 山本哲生; 幹事: 香内 晃

2) 地物研連(03/12/22)報告(配布メモ参照)

a. 委員長と幹事の選出

地物研連委員長: 西田篤弘(第19期第4部会
員)

幹事: 松浦(東大理), 川辺(東大海洋研)

b. 学術会議の動向

西田委員長から以下についての報告があった。

*) 19期に至る経緯と今後の見通し(西田)

18期吉川会長発言

・研究者の意見集約という従来の役割に加えて、社会への発言を積極的に行なってゆかねばならない。

・19期の任期はH17年3月31日までの予定(学術会議関連新法成立時)

・20期から(吉川案)

・研連を廃止。「連携会員」を同人数程度設ける。

・従来研連がもっていた科研費審査員の推薦機能はなくなる。

・科研費審査は学振「学術システム研究センター」を立ち上げる。

*) 学術会議第4部会(H15年12月18日)報告(西田)

役員: 郷部会長, 岩村副部長, 岡本幹事, 室伏幹事

・連携会員選出(惑星科学研連にも関係する事柄)

・学術体制常置委員会で学会の性格を調査。連携会員選出の基礎とする。

・各部から10学会を選んで調査

地球科学関係では多数の学会の分立が問題

*) 研連の再編

c. 小委員会の継続と新設

- ・歌田委員から、固体地球物理グローバル観測ネットワーク小委員会の継続海底ケーブル観測小委員会の新規設置が提案され、質疑ののち承認した。

2月17日開催の組織制度常置委員会で正式に承認される予定。

- ・各研連・専門委員会に設置されている小委員会の継続、あるいは新設を希望する場合は、その必要性を各研連・専門委員会が招集申請書に基づいてし、継続・新設の提案を2月10日までにe-mail（招集申請書を添付）で研連委員に配信することとした。それを受けて、第4部会員である西田委員長と石田委員が第4部会に提出し、最終的に組織制度常置委員会で承認されることになる。

d. International Polar Year (IPY) 2007～2008への対応

- ・標記事項について、極地研連の白石、藤井両幹事から、これまでの経過の報告と本研連への依頼があった。IPYでの我が国の研究テーマをどうするかがの課題であり、現時点での我が国の計画書を12月15日にIPY計画グループに提出したが、これからも研究計画の追加は可能であり、今後は極地研連だけでなく研連横断で対応してほしいこと、極域に関連した国際計画はIPYの一環として計画してほしいこと、IPYへの参加を求める案内は個人に送られているので情報をつかみにくく、各研連で得た情報を極地研連に入れてほしいこと、などに対する本研連の協力が求められた。

- ・これに対し、学術会議総会ではIPYへの参加に関して好意的な反応があったことが紹介され、本研連に何をしてほしいのかを具体的に示すことが極地研連に要請された。

e. 次回の会合

第19期第2回会合を、2004年3月16日(火) 13時30分から日本学術会議で開催することとした。

3) 科研費審査員推薦説明会(04/01/20)報告(配布資料も参照)

上記説明会が学術会議で行なわれた。研連委員長が出席。

H17年度審査員推薦方法

- ・研連から学術会議へ「情報提供者」を推薦。これ

を学術振興会(学振)に推薦。学振が推薦された「情報提供者」から審査員を選出。

- ・これとともに、学振で学術システム研究センターを立ち上げ、「審査員候補者データベース(仮称)」を構築して行く。

- ・関連からの「情報提供者」推薦方法

- ・細目ごとに対応研連有り。(複数の時は、窓口研連)

- ・情報提供者数

第1段 ~ 3倍 × 新規

第2段 ~ 5倍 × 新規

情報提供者

- ・現審査員との重複は考慮不要 学振側で check

- ・重複機関の重なりは " "
- 多少 重複あっても OK

- ・推薦順位を implicit につける。

リストの上位から順に並べる。

(第1段審査)(informal)

(複数のページにわたる場合はページ No.をつける)

学振の方針

科研費 S, A をとった研究者もデータベースとして使う。

その他、参考資料を所属機関に請求することもある。

対応研連の見直し.....毎年やっている。

H18年度についても、行なう予定。

- ・次回の科研費(分科・細目)見直し

H20年



惑星科学研連に推薦依頼が来ている細目

第1段

細目

- ・固体地球惑星物理学：2名(対応7研連からそれぞれ2名を推薦。計9名)

- ・気象・海洋物理・陸水学：2名(対応6研連からそれぞれ2名を推薦。計9名)

- ・超高層物理学：3名(対応6研連からそれぞれ2名を推薦。計9名)

上記それぞれの細目について、対応研連から推薦された「情報提供者」を地物研連で調整。

(プラズマ科学分科プラズマ科学細目にも惑星科学研連が関連研連として入っている。今のところ推薦依頼はなし。)

第2段

1名(地球惑星科学関連研連からそれぞれ1名を推薦。計20名)



4) 科研費審査や今後の研連についての情報交換

・第18期惑星科学専門委員会(中澤委員長)で行なった惑星科学研究者の応募状況や採択状況についての調査結果(2002秋)が香内幹事から紹介された。

・科学技術政策の現状についてフリーディスカッションを行なった。

従来は測地審議会を通じて、それなりに一般の地球惑星科学者の意見を政策に反映するルートがあったが現在は測地審議会はなく、総合科学技術会議が仕切りつつある。

総合科学技術会議では少数者(地球惑星科学の専門家)でトップダウン的に政策が決定される。

現状では学会会議や研連での議論が総合科学技術会議での議論に反映されていない。

意見の反映方法を考えることや反映するためのパイプをつくる必要あり。具体策は?

学振についても同様。特に科研費の細目「惑星科学」の確立。

*ただし科研費のシステムは近々大きく変化する可能性が大きい。

総合科学技術会議の仕組み、決定プロセス、現在行なわれていること、等の調査をすることが必要。

少なくとも惑星科学で手持ちの案のサマリーをつくっておき、必要に応じて提案できる体制を整えておく。

*惑星科学の推進体制

理科教育への惑星科学からの寄与の仕方についての議論が行なわれた。

5) 惑星科学の将来計画の具体化方策

・惑星科学会将来計画委員会報告書(1996.6, 1997.10)の紹介

・境界条件が変化したことから、現代的な観点から再議論が必要。

・今回はあまり時間がとれなかったため、今後の惑星科学の振興策を次回以降に継続審議したい。

6) その他

・極地研連からのIPYへの協力申し入れ

南極隕石研究とIPYの関係について極地研の研究者に山本から問い合わせる。必要があれば極地研連に伝える。

7) 次回日程

合同大会時またはその前後。合同大会の各種会合の日時を参考にして詳細日時を後日決定する。必要に応じてそれ以前に行なう可能性もあり。

第19期第2回地球化学・宇宙化学 研究連絡委員会議事録

日時: 2004年3月8日(月) 13:30~16:30

場所: 日本学会会議 第6部会議室(6階)

出席者: 山中高光(会員), 海老原充(地球化学), 蒲生俊敬(地球化学), 佐野有司(地球化学), 清水洋(地球化学), 下山晃(化学), 鈴木德行(地質), 留岡和重(鉱物), 長尾敬介(地球化学)

欠席者: 中村栄三(岩鉱), 平原和郎(地球物理研連)

報告事項

1. 学会会議関係(山中会員より)

(1) 連合部会(平成16年2月16日開催)

日本学会会議法の一部改正法律案についての報告があった。概要は以下の通り。

(i) 内閣府への移管

総理府から移管され、科学者の意見を幅広く集約して政策提言することが求められ、総合科学技術会議と相補的な関係にあるものと位置づけられる。

(ii) 会員制度の改革

(a) 会員選考方法の変更

登録学術研究団体の推薦制から、日本学会会議が会員候補者(210人程度)を選考する方法に変更する。

(b) 定年制の導入・再任の変更

70歳定年制を導入し、任期を6年として再任を禁止する。

(c) 半数改選制の導入

3年ごとに半数の会員を改選する。

(iii) 内部組織の改革

(a) 7部制から、「人文科学」、「生命科学」、「理学及び工学」の3部制とする。

(b) 研連を廃止し、連携会員を新設する。(定員は決めないが、2,300人程度)

- (c) 総会主義を排除し、運営審議会を幹事に改組する。
- (d) 副会長を増員し、国際交流・協力を強化する。
- (iv) 施行日
平成17年10月1日を施行日とする。但し、初回会員の選考に係る部分は交付の日（現時点で未定）、内閣府への移管に係る部分は平成17年4月1日。研連から“課題別研連”への移行の期日についても現時点では不明。
- (2) 第4部会（19期第4回（平成15年12月18日開催）、19期第5回（平成16年2月16日開催））
 - (i) 小委員会の招集申請
第4部研連所属分として11小委員会が継続として、3小委員会が新規として申請が受理された。小委員会開催への補助はないが、学術会議認知団体として機能する。
 - (ii) 平成17年度概算要求
物理研連から4項目60,000千円の申請が出された。
 - (iii) 平成16年度日本学術会議主催公開講演会（第1回）の企画案募集
 - (iv) 平成18（2006）年度開催国際会議の共同主催
12件申請に対して6件が採択された。なお、2004年度、2005年度開催分の採択数はともに8件。
 - (v) 平成16年度代表派遣旅費の配分額の決定
清水委員長の2004 Goldschmidt 国際会議派遣が承認された。
 - (vi) 基礎科学振興に関する第4部WG
- 2．平成17年度科学研究費補助金審査員候補者の情報提供に係る分化細目別対応研連の見直し等（清水委員長）
これまでと変更なしということで、届け出は行わなかった。
- 3．平成16年度科学研究費補助金審査員候補者推薦作業に対する意見（清水委員長）
審査員候補者の推薦にあたっては、研究分野のバランス、研究機関や年齢構成などの留意事項を十分検討して行なっているので、研連の意見を尊重して頂きたいこと、を趣旨とする回答を学術会議宛に出した。
- 4．平成18年度科学研究費補助金に係るキーワードの見直し（清水委員長）

研連委員の意見をもとに、前18期と同様の内容の意見を学術会議宛に提出した。

- 5．学術体制常置委員会及び研究連絡委員会等役員合同委員会（第19期第1回）「平成17年度科学研究費補助金の審査委員として適切な研究者情報の提供について」（清水委員長）

平成17年度科研費審査委員の情報提供に関する標記書類を受けて平成16年1月26日付けで清水委員長から地球科学関係学協会会長宛に審査委員候補者の推薦依頼を行った。今回から学術会議からは候補者の推薦ではなく、審査員として適切な研究者のデータの提供を行うことが求められているが、本研連としては従来通りの方式で関係学協会から推薦頂くことにした。

- 6．「第4回国際極年への国内対応委員会」委員候補者の推薦（清水委員長）

都立大・奈良岡浩氏を極地研連に推薦し、メンバーとして確定した旨の連絡を受けた。

- 7．研連対応国際団体について（清水委員長）

IAGCが国会員を廃止して以来、IAGCの対応研連としての地球化学宇宙化学研連の位置づけが明確でないが、IAGCの役員を推薦するなど、積極的に関わりを維持している。

審議事項

- 1．平成17年度科学研究費補助金の審査委員として適切な研究者の情報提供について

- (1) 推薦依頼

本研連委員会では、細目「地球宇宙化学」の新規第1段審査委員3名に対して3倍の9名についての情報提供を行う。また、分科「地球惑星科学」の新規第2段審査委員4名に対して2ないし3名についての情報提供を行う。昨年と同じく18学協会への推薦依頼を行った。その際に、日本地球化学会には第1段審査委員9名以内と第2段審査委員3名以内を、それ以外の学協会には第1段審査委員2名以内と第2段審査委員1名の推薦を依頼した。第1段審査委員候補は17学協会から34名、第2段審査委員候補は17学協会から16名の推薦を得た。

- (2) 第2段審査委員の選考

全候補者を分野A（固体地球関係）と分野B（大気・水圏・生物圏関係）に分けた後、従来の投票手続きに従って候補者を選出し、3名の候補

者を推薦することとした。選出にあたっては同一機関に偏らないようにするなど、「科研費審査委員として適切な研究者情報の提出に係る留意事項」に従った。

(3) 第1段審査委員の選考

日本地球化学会から推薦された9候補者のうち上位5位までの者とそれ以外の学協会から1位で推薦された者を上位推薦者群に、それ以外を下位推薦者群に分けた後、各群ごとに候補者を分野A（固体地球関係）と分野B（大気・水圏・生物圏関係）に分けた。従来の投票手続きに従って上位推薦者群から上位候補者を選出した。下位候補者は全候補者から分野A、B別一括して選出し、合計9名の候補者の情報を提供することとした。選出にあたっては同一機関に偏らないようにするなど、「科研費審査委員として適切な研究者情報の提出に係る留意事項」に従った。

2. 第19期の活動方針

清水委員長から今期の活動方針として、(i)地球化学における環境学の位置づけ、(ii)アジア地域における地球化学の連携、の2つに課題が提示された。(i)に対しては、18期での「環境学における地球化学のあり方」の議論を受けて、視点を逆に、地球化学から環境をどう捉えるかを議論することは有意義であること、(ii)に対しては、学会議の国際交流に対する方針がユネスコ型に移行することが想定されることから、アジアとの連携はその方向と整合するものであり、積極的に議論するにふさわしい課題であること、が確認され、次回以降、よりまとまりのある議論を行うこととした。

3. 総会へ提出の研究連絡委員会報告

4月開催の総会への報告として、平成15年12月16日開催の第1回委員会と本平成16年3月8日開催の第2回委員会での審議事項を議事録に基づいて委員長がまとめることとした。

4. その他

(1) 研究用原子炉に関する要望書の作成に関して

前回、海老原委員から要請された研究用原子炉に関する要望書作成に関して、委員間で文案を電子メールで回覧し、最終案を作成することが了承された。

(2) 次回の委員会の日程について

次回の委員会を5月28日午後1時半より開催することとし、上記審議事項2の今期の活動計画に

関して、具体的に議論することとした。

鉱物学研究連絡委員会・鉱床学専門委員会 合同会議（第19期・第2回）合同会議議事録

1. 開催日時：平成16年3月16日(火) 13:30~17:00

2. 会場：日本学会議 第5部会議室（6階）

3. 出席者：

学会議会員：山中高光（大阪大学）

鉱物学研究連絡委員会：山中高光（大阪大学）、赤井純治（新潟大学）、飯石一明（山口大学）、藤野清志（北海道大学）、松井正典（姫路工業大学）、山崎淳司（早稲田大学）、吉田武義（東北大学）

鉱物学研究連絡委員会

鉱床学専門委員会：赤井純治（新潟大学）、石渡明（金沢大学）、榎並正樹（名古屋大学）、工藤康弘（東北大学）、鹿園直建（慶応義塾大学）、千葉仁（岡山大学）、林謙一郎（東北大学）、水田敏夫（秋田大学）、森下祐一（産総研）

4. 議事

第19期・第1回議事録の確認を行った。

報告事項

1) 学会議報告

山中学術会議会員から2月16日に開催された学会議連合部会について報告があった。日本学会議法の改正案について紹介されたが、主要な改正点は以下のようである。

- ・所管官庁が総理府から内閣府へ移管され、日本学会議は科学者の意見を幅広く集約し政策提言を行い（ボトムアップ）、総合科学技術会議は直接に科学技術政策を形成（トップダウン）する役割を担う。
- ・会員制度が改革される事となった。従来は登録学研究団体が会員を推薦していたが、日本学会議が独自に会員候補者（210人程度）を選考することとなる。会員の70歳定年制が導入され、任期は6年とし再任は禁止される。また3年毎に半数の会員が改選される。
- ・内部組織が改革され、従来の7部制から3部制（人文科学、生命科学、理学及び工学）へと変更となる。研連は廃止され、新たに連携会員（定員は未定だが2,300人程度を想定）が設けられる。総会主義が排除されて、運営審議会が幹事会に改組される。
- ・以上の改正は平成17年10月1日に施行されるが、内閣府への移管は平成17年4月1日に実施される。

引き続き12月18日および2月16日開催の第4部会の報告があった。

- ・平成16年度開催の国際会議への代表の派遣，および基礎科学振興に関するワーキンググループの活動について報告された。

2) IMA 国際関係報告

山中学術会議会員より IMA 会費480ドルを学術会議から支払うように手続きを行ったことが報告された。

3) IMA 組織委員会報告

- ・山中学術会議会員より平成18年度(2006)開催国際会議の共同主催に関するヒアリングが3月2日に実施されたことが報告された。総申請数12件中の6件が採択される予定である。
- ・日本学術会議からの財政援助を得るために，IMA 2006 Kobe は日本学術会議，鉱物学会，岩鉱学会，資源地質学会が共同主催するように申請の変更手続きを行ったことが報告された。財政援助が得られるかどうかは6月頃判明する予定である。共同主催の他にも後援学会10，後援協会・団体8，協力研連4の協力が得られている。

審議事項

1) 平成17年度科研費補助金審査委員候補者の情報提供について

従来は日本学術振興会に審査委員候補者を推薦していたが，平成17年度からは審査委員候補者の情報提供をするように制度が変更になった旨の説明が山中学術会議会員からあった。その後，「科学研究費補助金の審査委員として適切な研究者情報の提供に係わる留意事項」に従って，分科「地球惑星科学」の二段審査委員候補者，および細目「岩石・鉱物・鉱床」の一段審査委員候補者の選出作業を行った。

二段審査委員候補者については，資源地質学会，日本岩石鉱物鉱床学会，日本鉱物学会から推薦のあった候補者リストを基に，委員の投票により鉱床，岩石，鉱物各分野の順にそれぞれ1名合計3名を決定した。一段審査委員候補者については，日本鉱物学会，日本岩石鉱物鉱床学会，資源地質学会，日本地質学会，日本粘土学会，日本地球化学会から推薦のあった候補者リストを基に，委員の投票により岩石，鉱物，鉱床各分野の順にそれぞれ3名合計9名を決定した。

次年度以降は今回推薦を行った各分野を順送りする事を申し合わせた。

2) IMA 各コミッションの日本側委員について

標記について以下方々に受諾を打診することとした。

Commission on Applied Mineralogy：溝田忠人

Commission on Classification of Minerals：宮脇律郎

Commission on Crystal Growth of Minerals：塚本勝男

Commission on History and Teaching：渡辺隆または沓掛俊夫
Commission on New Minerals and Mineral Names：松原聡

Commission on Museums：豊逢秋または青木正博

Commission on Ore Mineralogy：清水正明

Commission on Physics of Minerals：大谷栄治

Commission on Gem Minerals：宮田雄史

Working Group on Abstract：砂川一郎

Working Group on Cosmic Mineralogy：留岡和重

Working Group on Inclusion in Minerals：円城寺守

Working Group on Mineral Equilibria：赤荻正樹

Working Group on Organic Minerals：田崎和江

3) IMA 組織委員会の懸案事項について

IMA 2006 Kobe 用キャッチコピーについて現在18の案が出されていることが報告され，意見交換を行った。

4) 第19期の活動方針について

研連の改組に対応すること及び IMA 2006 Kobe 組織委員会に協力して行くことが再度確認された。平成16年度から国立大学が独立法人となることを鑑み，大学の組織や運営がどのように変わってゆくのかが，人事，予算，評価等について各大学の現状把握や情報交換を密にすることの重要性が確認された。このような情報を基に，岩石・鉱物・鉱床学の将来計画を提言するのが研連の役割であるとの認識で一致した。一部の大学は21世紀 COE プログラムに採択されたが，これに伴う変化についても情報を密に交換して行くことが必要である。日本技術者教育認定機構(JABEE)の認定に係わる各大学の取り組みについて情報交換を行うこととする。

5) その他

次回開催日 5月21日(金)

北海道大学大学院理学研究科 地球惑星科学専攻教員公募

1. 職種・人員・専攻分野
地球惑星物質圏科学講座 教授 1名
専攻分野：地球化学
2. 応募資格：博士号を取得していること
3. 着任予定時期：決定後できるだけ早い時期
4. 応募書類
イ) 履歴書(内外の学会活動, 受賞歴, 参加しているプロジェクト研究歴, 各種研究費受領歴なども記載すること)
ロ) これまでの研究経過(2,000字程度)
ハ) 研究業績目録(和文のものは和文で表記すること)
A. 査読のある原著論文
B. 査読のない論文, 総説など
C. 著書
D. 解説, 報告などその他の出版物で特に参考になるもの
ニ) 主な原著論文の別刷または著書 10篇以内(複写可)
ホ) 今後の教育・研究の計画・抱負(2,000字程度)
ヘ) 応募者について照会が可能な方2名の氏名と連絡先
5. 応募締め切り：2004年5月31日(月) 必着
封筒の表に「教員公募関係」と朱書きし, 簡易書留にて郵送すること。
また, 公募書類中の第1ページに応募先講座名を明記すること。
6. 書類の送付先及び問い合わせ先：
〒060 0810 札幌市北区北10条西8丁目
北海道大学大学院理学研究科地球惑星科学専攻
鈴木徳行
Tel : 011 706 2730 (ダイヤル・イン),
Fax : 011 746 0394
E-mail: suzu@ep.sci.hokudai.ac.jp

北海道大学大学院理学研究科 地球惑星科学専攻教員(年限付き)公募

1. 職種・人員・専攻分野
地球惑星進化科学講座 助教授 1名
専攻分野：地球環境復元や地球表層圏における物質循環に関する古海洋学, 生物・有機地球化学。

備考：2009年3月31日までの年限付きで, 統合国際深海掘削計画(IODP)を推進するための下記の活動に積極的に関わる方。ある程度の英会話能力と日本語会話能力が必要。

- 1) 日本地球掘削科学コンソーシアムの運営や活動への参画と支援
- 2) 北大北キャンパスに設置されたIODP Management International, Inc. (IMI) 札幌オフィスとのリエゾンの役割
2. 応募資格：博士号を取得していること
3. 着任予定時期：2004年10月1日
4. 応募書類
イ) 履歴書(内外の学会活動, 受賞歴, 参加しているプロジェクト研究歴, 各種研究費受領歴なども記載すること)
ロ) これまでの研究経過(2,000字程度)
ハ) 研究業績目録(和文のものは和文で表記すること)
A. 査読のある原著論文
B. 査読のない論文, 総説など
C. 著書
D. 解説, 報告などその他の出版物で特に参考になるもの
ニ) 主な原著論文の別刷または著書 5篇以内(複写可)
ホ) 今後の教育・研究の計画・抱負(2,000字程度)
ヘ) 応募者について照会が可能な方2名の氏名と連絡先
5. 応募締め切り：2004年6月14日(月) 必着
封筒の表に「教官公募関係」と朱書きし, 簡易書留にて郵送すること。
また, 公募書類中の第1ページに応募先講座名・職種を明記すること。
6. 書類の送付先及び問い合わせ先：
〒060 0810 札幌市北区北10条西8丁目
北海道大学大学院理学研究科地球惑星科学専攻
中川光弘
Tel : 011 706 3520 (ダイヤル・イン),
Fax : 011 746 0394
E-mail: nakagawa@ep.sci.hokudai.ac.jp

地球惑星科学専攻 教員構成(2004年4月21日現在)
地球惑星物質圏科学講座
教授 藤野清志, 小笹隆司, 中川光弘(本公募)

助教授 新井田清信, 橋元明彦, 角皆潤, 永井隆哉
講 師 三浦裕行
助 手 中川書子

地球惑星進化科学講座

教 授 岡田尚武, 鈴木徳行, 在田一則 (2005年3月退職予定: 別途公募中)
助教授 川村信人, 西 弘嗣 (新規: 本公募)
講 師 沢田 健 (別途選考中)
助 手 岩田圭示, 前田仁一郎

地球惑星流体科学講座

教 授 播磨屋敏生 (2005年3月退職予定: 別途公募中), 渡部重十, 林 祥介
助教授 知北和久, 見延庄士郎, 倉本 圭
講 師 遊馬芳雄
助 手 小高正嗣

地球惑星物理科学講座

教 授 小山順二, 蓬田 清, 池田隆司, 日置幸介
助教授 森谷武男, 笹谷 努, 前田 丞
助 手 吉澤和範

地震火山研究観測センター (協力講座)

教 授 島村英紀 (2005年3月退職予定: 別途公募予定), 笠原 稔, 岡田 弘
助教授 高波鐵夫, 茂木 透, 大島弘光, 谷岡勇市郎, 橋本武志
助 手 山本明彦, 勝俣 啓, 高橋浩晃, 村井芳夫, 森 済, 西村裕一, 青山 裕

総合博物館 (教育協力)

教 授 松枝大治
助教授 箕浦名知男

なお, 教育・研究にあたっては上記の講座制にかかわらず, 研究室・グループ制で運営されており, その構成は変更が可能です。また全教官は, 大学院教育のほか, 全学教育・学部教育も担当しています。

大阪大学大学院理学研究科 宇宙地球科学専攻教員公募

1. 職種・人員: 教授・1名
2. 専門分野等: 地球科学 (実験系)

当専攻は, 宇宙・惑星・地球など幅広い時間空間に起こる自然現象や生命系までを含むさまざまな物質の極限状態を, 物理学を基礎として解明し, 伝統的な天文学や地球惑星科学とは異なる視点からの宇宙地球科学の構築を目指して研究教育を行っています。この趣旨を踏まえて, 地球科学 (実験系) の分野で新しい研究グループを立ち上げて率いていく, 意欲ある方を希望します。

3. 着任時期: 決定後できるだけ早い時期
4. 応募資格: 博士号を取得していること
5. 提出書類
 - (1) 履歴書 (国内外の学会活動, 受賞歴, 科研費等の獲得歴, 参加しているプロジェクト研究歴などを含む)
 - (2) 研究業績リスト (査読つき学術論文, 査読のない論文・総説など, 著書, 解説・報告書に区分してください)
 - (3) 主要論文5篇の別刷もしくはコピー (研究業績リストに 印を付して下さい)
 - (4) これまでの研究経過 (2,000字程度)
 - (5) 研究グループとしての研究・教育に関する今後の計画と抱負 (2,000字程度)
 - (6) その他特記すべき事項
 - (7) 意見を伺うことのできる方3名以内の氏名・所属と連絡先 (電話・e-mail など)

6. 公募締切: 平成16年6月9日(水) 必着

7. 書類送付先:

〒560 0043 大阪府豊中市待兼山町1 1
大阪大学大学院理学研究科宇宙地球科学専攻専攻長
川村 光
Tel: 06 6850 5543, Fax: 06 6850 5494
E-mail: kawamura@ess.sci.osaka-u.ac.jp

8. 照会先:

大阪大学大学院理学研究科宇宙地球科学専攻
土山 明
Tel: 06 6850 5800, Fax: 06 6850 5480
E-mail: akira@ess.sci.osaka-u.ac.jp

当専攻のホームページ:

<http://www.ess.sci.osaka-u.ac.jp/index-jp.html>

封筒に「教官公募書類在中」と朱書し, 簡易書留または書留で送付のこと

関西学院大学理工学部化学科教員公募

1. 公募人員：専任講師（着任時に35歳未満である方が望ましい）
2. 所属：理工学部化学科
3. 専門分野：無機・分析化学（地球化学・宇宙化学を含む）
4. 担当科目：無機・分析化学の講義・実験，一般教育の化学及び大学院科目。
5. 着任時期：2005年4月1日
6. 提出書類：(1)履歴書（写真貼付），(2)研究業績リスト，(3)主要論文の別刷り（コピー可，3編以内），(4)従来の研究経過と将来の研究及び教育に対する抱負（1,500字以内），(5)推薦書2通（または所見を求め得る方2名の氏名と連絡先）
7. 応募締切：2004年7月26日(月) 必着
8. 書類提出先：
〒669 1337 三田市学園2丁目1番地
関西学院大学理工学部長
篠原彌一（無機分析化学人事応募書類と表記して郵送。尚，提出書類は返却致しませんのでご了解下さい）。
9. 問合せ先：同理工学部 御厨正博
Tel：079 565 8365
E-mail: junpei@ksc.kwansei.ac.jp
付記：当理工学部では講座制をとっておりません。

金沢大学理学部地球学教室 教員公募について

金沢大学理学部地球学教室では，この度下記のように教員を公募します。

貴職におかれましては，本公募の周知と適任者の応募に便宜を図っていただきたく，お願い申し上げます。

採用職種：助手1名（大学院自然科学研究科所属になりますが，学部教育も行っていただきます）

専攻分野：鉱物学又は水圏の地球科学（水文学，地形学，堆積学など）

応募条件：

- (1) 採用予定日までに博士の学位を取得していること。
- (2) 専攻分野の研究業績があり，当教室の教員（下

記参考資料）と協力して研究を進めることができ，学生に対してその分野の研究指導ができること。

- (3) 室内実験の経験があり，SEM, TEM, EPMA, XRD, XRF, ICP-MS, FT-IR など分析機器の取り扱いに習熟しており，学生の室内実験を指導できることが望ましい。
- (4) 野外調査の経験があり，学生の野外実習を指導できることが望ましい。
- (5) コンピュータ及びネットワークについて相当の知識と経験をもち，それらを用いて数理演習を指導することができ，教室内のネットワーク管理を行えることが望ましい。

採用予定日：平成16年11月1日

提出書類（選考終了後は返却します）：

- (1) 履歴書（市販A4用紙，写真添付）
- (2) 研究業績目録（原著論文（査読の有無を明記），総説・報告書等，著書，学会講演に区分）
- (3) 代表的論文の別刷り又はコピー5編以内
- (4) これまでの研究概要と今後の教育・研究計画及び抱負（1,600字以内）
- (5) 応募者の研究経過等について意見を伺える方の氏名と連絡先（2～3名）

応募締め切り日：平成16年7月31日（当日消印有効）

書類提出先：

〒920 1192 金沢市角間町

金沢大学理学部地球学科 学科長 石渡 明 宛

（注）封筒には「応募書類在中」と朱書きし，書留にて郵送のこと。

公募に関する問い合わせ：

Tel：076 264 5723（地球学科事務室），

Fax：076 264 5746（同）

Tel：076 264 5724（石渡研究室）

E-mail: geoishw@kenroku.kanazawa-u.ac.jp

参考資料（当教室の研究・教育分野と教員）：【鉱物学】木原國昭教授，奥野正幸教授，【岩石学】荒井章司教授，石渡明教授，森下知晃助手，【地質・古生物学】加藤道雄教授，神谷隆宏助教授，長谷川卓助教授，【地球物理学】古本宗充教授，平松良浩助手，隅田育郎助手，【地球環境学】田崎和江教授，【水文地形環境学】柏谷健二教授，【環境鉱物学】佐藤努助教授，【地球年代学】長谷部徳子助教授。

小惑星表面採集試料の初期分析参加研究者の 第2回コンペティションについて

宇宙航空研究開発機構 (JAXA)・宇宙科学研究本部 (ISAS)・はやぶさサンプル分析検討委員会委員長
久城育夫

宇宙航空研究開発機構・宇宙科学研究本部 (JAXA/ISAS) では、世界初の小惑星サンプルリターンに挑戦する工学実験探査機「はやぶさ (MUSES-C)」を、昨年5月にM-V型ロケットにより成功裏に打ち上げました。現在順調に電気推進エンジンを連続運用しながら、本年5月の地球スイングパイに向けて惑星間空間を飛行中です。

探査機は2005年夏に大きさ600 m × 300 m ほどでS型スペクトルに分類される近地球型小惑 (25143 Itokawa) にランデブーし、全球観測した後、総重量数 g 程度の表面物質の微小破片粒子 (注1) を2007年夏に地球へ持ち帰る予定です。採集場所が明らかでかつ地球環境と反応していない他の天体表面の物質を地上の研究室にもたらずサンプルリターンミッションは、アポロおよびルナ計画以来約30年ぶりであり、国内外の注目を集めています。

このミッションの科学的成果を最大限に挙げるには、回収試料の初期分析とその後の詳細分析に供するための試料の管理・配分作業が、いかにシステマティックかつ正確に実施できるかにかかっています。そこでJAXA/ISASでは国内の各種分析手法の専門家にご協力頂き、はやぶさサンプル分析検討委員会を発足させ、初期分析、及び管理・配分作業の方針・実施方法などについて過去数年間、議論を深めてまいりました。

その結果、JAXA/ISASの研究者および国際協力協定を結んでいる米国およびオーストラリアの代表研究者とチーム (HASPET (Hayabusa Asteroidal Sample Preliminary Examination Team), 旧名称「MASPET」) を組んで、試料の初期分析を行っていただく研究グループを広く日本全国に呼びかけることになりました。1999年に第一回コンペティションを公募したところ、全国から11グループのご応募を頂きました。下記の要領に沿って国内外の研究者による二段階ピアレビューを実施し、2001年には6チームが当時の時点で初期分析チームに適切な高い分析技術を持っていると認定されました。詳細については、2003に

JAXA/ISASが発行した「ISAS Report SP No. 16: The First Open Competition for the MUSES-C Asteroidal Sample Preliminary Examination Team」をご参照下さい (注2)。

その後探査機が無事打ちあがり、第一回実施から3年以上が経過して微量分析技法のさらなる進歩や優秀な若手研究者も登場しつつあるこの時期に、第二回コンペティションを開催することに致しました。今回の参加資格には、前回参加の有無や評価結果は関係ございません。全国の分析研究者のご協力を賜わり、世界初の小惑星サンプルリターン探査から最大限の科学的成果を引き出したいと考えております。ぜひ皆様の積極的なご応募をお願い致します。

なお、ここでいう「初期分析」とは、試料回収後1年以内に国際的に公募が出される詳細分析に先んじて、採集試料全体の物性、化学的、岩石・鉱物学的特徴に関して基本的な記載を行い、詳細分析の応募に際して世界中の研究者が参考できるデータベースを作成することを目的としています。HASPETメンバーの最終審査は、第一回、第二回コンペティションの結果、はやぶさ探査機による小惑星でのその場計測で得られた知見、その他の参考情報から総合的に判断されます。チーム編成の発表は2006年初旬に行われ、日本全国で約10グループを選抜する予定です。2006年度にはHASPET全体で、あらゆる採集試料の条件を考慮した分析手順や手法を模擬するための初期分析リハーサルを実施します。その結果次第でHASPETメンバーの再調整を行うこともありえます。

今回の本審査も前回同様、書類審査および未知の試料の分析結果について行います。分析試料は、公平を期すために、予め準備されたものをJAXA/ISASから配布致します。分析審査は、(1)分析結果およびその精度、(2)必要最小重量 (特に破壊分析の場合)、(3)分析に要する期間等の観点から行われます。審査試料の配布は書類審査後、2004年8～9月の間のご希望日を予定しています。なお、試料を受領してから分析結果のレポートを提出して頂くまでの分析期間は、最長6ヶ月とします。

募集締切：2004年5月31日

応募書類郵送先、および問い合わせ先：

宇宙航空研究開発機構・宇宙科学研究本部・固体惑星科学研究系 (担当：矢野創 宛)

〒229 8510 神奈川県相模原市由野台3 1 1
Tel : 042 759 8197 , Fax : 042 759 8457
E-mail: yano.hajime@jaxa.jp

応募資格

- (1) 2007年夏のはやぶさ試料回収の時点で、国内に活動基盤を持つ日本人研究者個人の単独、あるいは本人が研究責任者となるグループであって、応募提案通りかそれ以上のレベルの分析を実行できる見込みのある方。
- (2) 試料回収以前にも、ミッションのスケジュールに沿って、JAXA/ISAS が主催する初期分析のリハーサルなどに積極的にご協力頂ける方。

提出書類（フォーマットは自由）

- * 分析課題
- * 応募者（研究責任者）、共同研究者全員の略歴、研究業績
- * 実施する分析手法の解説
- * 使用する分析施設（今回の公募では、応募者の所属機関の分析装置を用いること）
- * 期待される分析結果と精度
- * 破壊・非破壊分析の区別
- * 分析必要最小重量（審査の前提は総重量100 mg 未満）
- * 分析に必要な期間（6ヶ月未満）
- * 希望する分析開始時期（2004年4～5月の間で指定してください。）
- * 試料の受領方法（郵送、またはJAXA/ISASにて受け取りのいずれかを明記。）

注意事項

- (注1) 目標天体・地球近傍小惑星 Itokawa に関する情報、ミッションプロファイル、サンプラーの試料採集性能のデータなどの詳細については、以下の URL をご参照下さい。
- * JAXA/ISAS ホームページ：
<http://www.isas.jaxa.jp>
 - * JAXA/ISAS はやぶさ公式ページ：
<http://www.isas.jaxa.jp/j/enterp/missions/muses-c/index.shtml>
 - * MUSES-C ホームページ：
<http://www.muses-c.isas.ac.jp/Japanese/index.html>

* はやぶさ勝手に応援ページ：

http://www.as-exploration.com/muses_sp/muses.html

- (注2) 第一回コンペに関するレポート（ISAS Report SP-16, Eds. I. Kushiro, A. Fujiwara and H. Yano (2003)）を希望者に無料にてお配りします。希望者は矢野（上記問い合わせ先参照）までお申し込み下さい。
- (注3) 分析グループ内に海外の研究者を国内に呼び寄せるか（=論文は日本のアドレスから出す）どうかは、研究責任者の判断におまかせします。
- (注4) 国内の複数の研究グループが1つのグループとして申請することも可能です。
- (注5) 前回コンペに応募された方でも、今回の公募に再応募できます。
- (注6) 前回コンペの評価結果は、今回の評価には関係ございません。
- (注7) HASPET メンバーとなられても、その後の詳細分析の国際公募には応募できます。

ご参考：審査・活動の流れ（予定）

応募書類締め切り：2004年5月31日

（はやぶさ探査機，地球スイングバイ：6月頃）

第1次審査終了（審査用試料配布対象の決定）：7月31日

審査用試料の配布期間：8～9月

試料配布終了後9月30日

試料分析期間：自己申告制（サンプル配布後最大6ヶ月以内）

分析レポート提出最終締め切り：2005年3月31日

（はやぶさ探査機，小惑星到着：6月頃）

第2次審査レビュー終了：9月30日

評価委員会結論，分析検討委員会承認，審査結果通達：10月中

（はやぶさ探査機，試料採集：10月頃）

（はやぶさ探査機，小惑星出発：11月）

HASPET メンバー最終編成発表（補充を含む）：2006年1～2月

HASPET 初期分析リハーサル：2006年度いっぱいを目処

（はやぶさ回収カプセル，地球帰還：2007年6月）

HASPET 初期分析開始：6月

Chemical Abstracts 利用法講習会

主催：化学情報協会

Chemical Abstracts (CA) の CD-ROM 版 (CA on CD) の利用方法を中心に、冊子体 Chemical Abstracts の構成、特徴などもあわせて説明します。普段図書館や研究室で CA をご利用の研究者、教官の方や司書の方に最適です。

日時：平成16年7月08日(木) 13時30分～16時

大阪会場

平成16年9月01日(水) 13時30分～16時

東京会場

会場：東京会場 中居ビル6F

(東京都文京区本駒込6-25-4)

大阪会場 千里ライフサイエンスセンタービル
10F (大阪府豊中市新千里東町1-4-2)

内容：1. Chemical Abstracts の構成
2. Chemical Abstracts の各索引の特徴
3. CAonCD の概要および使い方

受講料：無料

参加申込締切：定員(12名)になり次第締切

申し込み先：

〒113-0021 東京都文京区本駒込6-25-4 中居ビル

(社)化学情報協会講習会係

Tel: 0120-151462

E-mail: lecture@jaici.or.jp

第48回粘土科学討論会

主催：日本粘土学会

共催：資源・素材学会、資源地質学会、ゼオライト学会、地盤工学会、日本化学会、日本火山学会、(予定)日本原子力学会、日本岩石鉱物鉱床学会、日本鉱物学会、日本セラミックス協会、日本セラミックス協会原料部会、高分子学会、日本第四紀学会、日本地学教育学会、日本地球化学会、日本地質学会、日本土壌肥料学会、日本熱測定学会、日本ペドロロジー学会、農業土木学会(50音順)

会期：2004年9月16日(木)～18日(土)

会場：新潟大学五十嵐キャンパス、工学部

(〒950-2181 新潟市五十嵐二の町8050)

日程：9月16日(木) 9:00～12:00 口頭発表

13:00～14:00 特別講演

14:00～17:30 シンポジウム

18:00～ 懇親会

9月17日(金) 9:00～11:00 口頭発表

11:00～12:00 日本粘土学会総会

9:00～12:00 ポスター展示

12:00～14:30 ポスター討論

14:30～17:30 口頭発表

講演：A. 一般公演(口頭発表, ポスター発表)

B. 会長講演 山岸皓彦(東大院・理)

C. 平成16年粘土科学討論会シンポジウム

「Claysphere Part 3: 生活空間・身の回りの粘土
粘土圏環境における粘土の利用」

シンポジウム趣旨：一昨年、昨年のシンポジウム(Claysphere Part 1, Claysphere Part 2)に引き続いて、本年度はICC 2005へ向けての最終シンポジウム「生活空間・身の回りの粘土 粘土圏環境における粘土の利用」を開催します。このシンポジウムでは地球サブシステムを構成する粘土圏を身近な粘土圏環境としてとらえ、粘土・粘土鉱物が実際にどのような特性を応用し、どのように産業社会で使用されているかを議論します。また、循環型社会と粘土製品との関わり、ユーザーから見た粘土製品の評価などについて討論します。

内容(いずれも仮題)次世代型建築内装材/合成マイカ製品/セラミックス関連製品/高分子ナノコンポジットの材料特性/廃活性白土に残留する油脂のバイオディーゼル燃料への変換/化粧品と粘土鉱物

講演申込方法：日本粘土学会ホームページ

(<http://www.soc.nii.ac.jp/cssj2/index.html>)内の第48回粘土科学討論会参加申込用Webページ(J-STAGE)をご利用ください。講演題目、200字程度の講演概要等を入力していただきます。

Webページが使えない場合は、下記あてお問い合わせください。

講演申込締切：2004年6月18日(金) 12時。

J-STAGEは6月2日から申込が可能です。

講演要旨締切：2004年7月23日(金) 郵送必着

懇親会：9月16日(木) 18時から、新潟大学五十嵐キャンパス、生協第一食堂にて。

見学会：9月18日(土)

見学場所(予定)：中条羽黒山粘土鉱床、水沢化学、黒川村、クレーストーン博士の館(博物館)、胎内高原ビール園

見学会参加費：5,000円（前日宿泊費は除く）：支払い方法他は参加者に個別にご連絡します。

見学会申込締切：7月23日(金)

参加費：討論会参加登録費 会員・共催学会員2,000円，学生会員1,000円，非会員3,000円，非会員学生1,500円

講演要旨代金3,000円，懇親会費 一般5,000円，学生3,000円

講演は無しで，参加だけの方も，討論会・懇親会・見学会参加申込を，7月23日までに，必ず連絡して下さい。

討論会・懇親会・見学会参加申込方法：メールまたは，官製はがきに参加者氏名・所属・連絡先住所，e-mail address を記入して，下記送付先にお送り下さい。

送付先・問い合わせ先：

〒950 2181 新潟市五十嵐二の町8050

新潟大学理学部地質科学教室 赤井純治

Tel : 025 262 6186 , Fax 025 262 6194

E-mail: akai@sc.niigata-u.ac.jp

<http://wwwsoc.nii.ac.jp/cssj2/index.html>

第一回 SOLAS International Summer School 参加報告

氏名(所属): 谷本浩志(国立環境研究所大気圏環境研究領域), 藤井賢彦(日本学術振興会/国立環境研究所, 現メーン大学), 大木淳之(日本学術振興会/北海道大学)

概要

2003年6月30日～7月11日の12日間，フランス・コルシカ島において第一回 SOLAS International Summer School が開催された。日本からは藤井賢彦(日本学術振興会特別研究員/国立環境研究所, 現メーン大学), 大木淳之(日本学術振興会特別研究員/北海道大学), 谷本浩志(国立環境研究所)の3名が参加したのでその様子を報告したい。

SOLAS は Surface Ocean-Lower Atmosphere Study の略で，22カ国・250人の科学者によって2000年2月に策定され，IGBP (International Geosphere-Biosphere Programme), SCOR (Scientific Committee on Oceanic Research), WCRP (World Climate Research Program), CACGP (Commission on Atmospheric Chemistry and Global Pollution) の傘

下，新たに開始された国際イニシアチブである。その名のとおり下層大気と海洋表層の物質循環研究で，「大気・海洋システム間における主要な生物地球化学的・物理的相互作用とフィードバック，そして大気・海洋システムが気候変動や環境変動にどのように影響し，影響されるのか定量的に理解すること」を目指したプログラムである。このような学際的研究を進めていくためには，従来の学問分野の枠組みを越えた幅広い知見が不可欠であり，国内外を問わず異分野の研究者との交流が極めて重要である。今回のサマースクールは，立ち上がったばかりの SOLAS プログラムを推進するにあたり周辺領域の若い研究者(とその卵の学生)に興味を持ってもらおうと開かれたものであり，随所に若手をエンカレッジする雰囲気を感じられた。サマースクールが開催された場所はナポレオンの生誕地として有名なコルシカ島の主要都市アジャクシオから50 km 程度北の Cargese という小さな村にあるコルシカ大学 Institut d'Etudes Scientifiques であった。200人を超える応募者の中から72人(男性34人，女性38人)の学生が選抜され，12日間をともに過ごした。学生は PhD コースの学生が大半とポストドクターが若干名という人数構成であり，その国籍はヨーロッパ，北米(アメリカ，カナダ)，南米(ブラジル，コロンビア)，アジア(インド，中国，韓国，バングラディシュ，イスラエル，日本)，オセアニア(オーストラリア，ニュージーランド)，アフリカ(アルジェリア，マラウイ)(研究上の滞在国とは必ずしも同じではない。)など多岐にわたる。また，学生の専門分野も海洋物理学，海洋化学，大気化学，気象学，海洋生物学，海洋堆積物学，研究手法も観測，モデリング，室内実験，衛星データ解析など多岐(または複数)にわたる。1日のスケジュールは9時開始，午前中に講義2コマ，昼食そして3時間のシエスタを経て夕方に再び講義2コマ，20時半終了というものであった。この他，航海実習と各自の研究発表がバランスよく配置され，全体的にかなりハードなスケジュールであった。

講義

講義は SOLAS が扱う幅広い研究領域を十分にカバーし，合計22にも及んだ。具体的には，温室効果気体と気候変動，海洋学，大気化学，炭素循環，生物地球化学モデリング，海洋生物学，気体交換など基礎講義，リモートセンシング，データ同化など実際の講義

義, 海洋エアロソル, DMS と硫黄循環, 栄養塩循環, 鉄循環, 気相化学反応, 栄養塩の大気供給, 沿岸地域における物理・生物地球化学プロセスなど応用的講義と各論が世界各国から招かれた各分野の第一線級の研究者によって行われた。

実習

実習は期間中の中盤3日間を利用して行われた。内容は船舶を利用したミニ海洋観測航海(CTD, 海水試料採取, プランクトンネット), その航海で得た海水試料の分析実験(クロロフィル, 塩分濃度, プランクトン観察), 大気海洋間の気体交換係数計測実験, 物質循環モデリングおよび衛星データ解析, プレゼンテーションスキルの5項目であった。観測や実験系の研究者はモデリングの経験が少なく, 逆にリモートセンシングやモデリングを主体とする研究者は船舶観測やラボ実験の経験が少ないため, 相互の研究の現場とそれに伴う苦労を垣間見る非常に良い機会となった。

発表

実習では, 学生が作成してきたポスターを参考例にして, 研究内容を効果的にアピールできるポスターの作り方など, 非常に実践的なレッスンがあった。また, 学生には5分間の口頭発表も課された。当初, 思い思いのスタイルで発表を試みた学生が, プレゼンテーションスキル実習で学んだ内容を踏まえて, 本番では非常に見事なプレゼンテーションを披露していたのが印象的であった。日本の大学院でもこのような実践的なことを学ぶ機会があれば良いと強く感じた。

終わりに

こうして振り返ってみると, 照りつける地中海の太陽と海に囲まれ, 早朝から夜更けまでよく学び, よく議論し, よく遊び, そしてよく会話した二週間であった。世界一流の講師から薫陶を受けたことは言うまでもないが, 学生同士も良い相乗効果をもつ雰囲気の中で自由にのびのびと学ぶことができたように思う。学生は幅広い分野から集まっているものの, 誰もがSOLASの専門家ではなかった。しかし, 参加した学生誰もがSOLASが, 俎上に載せようとしている地球科学に興味を持ち, SOLASプロジェクトの今後の発展を自分のものとして考えたことは間違いない。第一回にあたる今回が予想以上の大成功であったことは学生・講師・オーガナイザーの誰もが感じるところ

であった。今回は2005年8月29日から9月9日にかけて同じくコルシカ島で開催される予定になっている。今回の経験を踏まえて2年後, より実り多きサマースクールが開催されるよう希求してやまない。日本の若手研究者・学生もSOLASに興味を持って欲しいと感じたことは言うまでもないが, 海に囲まれた日本でも学会だけでなく世界中の若手呼んでこのような会を主催できれば非常に意義深いという実感を持っている。

東京大学海洋研究所・植松光夫先生には旅費の一部を補助していただきました。ここに感謝の意を表します。

なお, サマースクールやSOLASプロジェクトの詳細は下記のURLで見ることができます。

SOLAS Summer School: <http://www.uea.ac.uk/env/solas/summerschool/welcome.html>

SOLAS Project: <http://www.uea.ac.uk/env/solas/>

書評

産総研シリーズ「火山 噴火に挑む」
独立行政法人産業技術総合研究所地質調査総合センター編 丸善株式会社 定価1,500円(税別)

この本は, 平成13年4月に誕生した独立行政法人産業技術総合研究所が, 自ら行なっている研究への取り組みを社会一般に知らせることを目的とした「産総研シリーズ」の第6巻目として出版された。地球科学関連のテーマとしては最初の出版であるので, 産総研内で火山研究が高い評価を受けている証でもあろう。

内容的には, 第1章で産総研における火山研究の位置付けを述べたあと, 第2章から5章までそれぞれ有珠火山, 三宅島火山, 富士火山, 雲仙火山での研究の取り組みが詳細に述べられており, 執筆者は18名にのぼる。全体的な印象であるが, 読者層としての一般の社会人に火山研究を分かりやすく伝えようという啓蒙書というよりは, 産総研はこんなに火山研究を頑張っているぞという宣伝の匂いが強く出ている書物のように感じた。個別の火山の個別の研究の解説から出発して火山噴火の全容を理解させようとしているが, 科学啓蒙書を意図するのであれば, 各節ごとの独自性が強く, 執筆者によって異なるスタイルや力点, 難易度などについて全体としての統一にも気を使って欲しかった。

産総研の火山研究は、活動的な火山でのリアルタイムの観測研究と、過去の噴火の調査研究や理論的・実験的研究を総合的に行なっていることが、各所に書かれているが、有珠火山や三宅島火山の噴火に際して産総研の研究者がいかに活躍してきたかを時時刻刻と示している所は大変に臨場感にあふれていて、読んでいて面白い。中でも、得られたデータからマグマ上昇モデルを作って行く所は、産総研内のディスカッションがそのまま書かれているようで、火山研究の生の現場

を知るのによってつけの書物である。火山学を志す大学院生がこの本を読むと、産総研グループに加わって火山研究をやりたいと思う人が出てくるのではと、期待する次第である。 (野津憲治)

*執筆者：篠原宏志，東宮昭彦，宇都浩三，斎藤英二，宝田晋治，羽坂俊一，須藤茂，佐藤努，松本則夫，太田英順，松島喜雄，伊藤順一，斎藤元治，風早康平，川邊禎久，高田亮，山元孝弘，星住英夫

講演番号記載 スペース (空欄)	<div style="text-align: right; margin-bottom: 10px;"> 講演題目 ○富士太郎¹、静岡次郎¹、清水三郎² (¹静大理, ²東海大海洋学部) </div>
講演要旨作成上の注意	<ol style="list-style-type: none"> 1) フォントはできるだけ明朝体を使ってください。 2) 原稿は、B5版になります。文字が小さくなりすぎないように注意してください。 3) 枠は範囲を示しているだけで書く必要はありません。 4) A4用紙に上部31mm、下部30mm、左23mm、右20mmのマージンを設定してください 5) 研究題目、発表者、ならびに所属は、例示に準じて記入し、講演者の左側に○印をつけてください。講演題目などに関する英文表記についても同様です。 6) 左上の講演番号を印刷するスペースは必ず空けておいてください。 7) PDFファイルで送るため、300kb程度のファイル容量で作ってください。 8) 一般講演は、要旨1ページ、課題講演は2ページまで 9) 原稿はプリントして正常に印刷できるかご確認の後送ってください。 10) 講演要旨の締め切りを厳守してください。
Theme title	○ T. Fuji ¹ , J. Shizuoka ¹ and S. Shimizu ² (¹ Fac.Sci., Shizuoka Univ. ² Dept.Ocea.Tokai Univ.)

日本地球化学会 静岡大会 参加申込書 兼 各種手配申込書

【 学会参加・講演要旨集事前購入・宿泊・交通・弁当・保育室・懇親会】

静岡大学生協協同組合

FAX: 054-237-3205

(いずれかに○印)

新規申込 変更 取消 ※郵送またはFAXにてお申し込み下さい。お申込控えは必ずお持ち下さい。

所属先 (お勤め先)	フリガナ 代表者氏名	自宅電話 () () ()
確認書送付先 所属先、自宅		所属先電話 () () ()
		FAX () () ()

ご利用者名(必ずフリガナをご記入下さい。)

フリガナ 氏名	性別	年齢	参照(1) 会員	参加	参照(2) 講演要旨集のみ 送・受	懇親会			宿泊			お弁当			保育室利用(利用時間をご記入下さい)								
						9/21 (火)	9/22 (水)	9/23 (木)	9/19 (日)	9/20 (月)	9/21 (火)	9/22 (水)	9/23 (木)	9/20 (月)	9/21 (火)	9/22 (水)	お子様氏名 年齢	9/20 (月)	9/21 (火)	9/22 (水)			
例 シズオカ ハナコ 静岡花子	女	30	正	○	送・受	○			第一 第二 第三	第一 第二 第三	第一 第二 第三	○	○	○	太郎	10:00	18:00	○	○	○			
(1)					送・受			第一 第二 第三	第一 第二 第三	第一 第二 第三					才						○	○	○
(2)					送・受			第一 第二 第三	第一 第二 第三	第一 第二 第三					才						○	○	○
(3)					送・受			第一 第二 第三	第一 第二 第三	第一 第二 第三					才						○	○	○

参照(1) 正=正会員、院=院生割引会費適用正会員、学=学生会員、名=名誉会員、家=会員の家族、非=非会員、非学=非会員学生。
参照(2) 大会不参加で講演要旨集購入ご希望の方は「参加」欄に「×」を記入し必要冊数を、参加者で観覧必要の方は「送・受」の一方を○で開き追加冊数をご記入下さい。

■JRおよび航空券

カタカナ氏名・年齢 電話	性別	区間	乗車日	指定券		乗車券	
				乗車区間	枚数	乗車区間	枚数
(1) () ()	才	発着	/	頃		普通・自由・G・禁煙 B寝台・A寝台	大人 子供
(2) () ()	才	発着	/	頃		普通・自由・G・禁煙 B寝台・A寝台	大人 子供
(3) () ()	才	発着	/	頃		普通・自由・G・禁煙 B寝台・A寝台	大人 子供

記事欄

注意1: 上記期間外の宿泊・交通などのお申込みの場合、記事欄にお書き添え下さい。
注意2: 申込者の口座を必ずご記入下さい。取消・変更にもなう返金の際に必要になります。

振込銀行	銀行	支店	口座番号	普通・当座
口座名義人(フリガナ) () () () () () ()				

ニュースへ記事やご意見をお寄せください

皆様の情報・原稿をお待ちしています。地球化学に関連した研究集会，シンポジウムの案内，人材募集，書評，研究機関の紹介など何でも結構です。編集の都合上，電子メール，フロッピー（マックもしくは Dos/V いずれでも結構です）での原稿を歓迎いたしますので，ご協力の程よろしく願いたします。次号の発行は2004年8月上旬頃を予定しています。ニュース原稿は6月上旬までにお送りいただくよう，願いたします。また，ホームページに関するご意見もお寄せください。

編集担当者

米田成一

〒169 0073 東京都新宿区百人町3 23 1
国立科学博物館理工学研究部

Tel : 03 3364 7142 , Fax : 03 3364 7104

E-mail:s-yoneda@kahaku.go.jp

高橋和也

〒351 0198 埼玉県和光市広沢2 1
理化学研究所加速器基盤研究部

小林貴之（ホームページ）

〒156 8550 東京都世田谷区桜上水3 25 40
日本大学文理学部